

始春鼓動

016 海城中学高等学校 鉄道研究会

わたしはうらかな春光を肌を感じながら、久しぶりに故郷に帰って来た。

今日はお祭りの日なのだ。

春風が列車の窓隙から吹き込み、中からも外からも列車のエンジン音が聞こえる。

わたしは駅から降り、向こうの山のある方まで歩いた。

「見下ろしに春の棚田の畦幾重」

これは昭和期の俳人・清崎敏郎の句だ。

下呂の棚田を見下ろすとその景色の素晴らしさには本当に心を打たれる。

坂を下りながら遠くまで伸びる農道に目をむけてみる。

そこには、くっきりとした二本の轍が、確かな人の営みを、そこに刻んでいた。

こうして感慨に浸っていると、濃い橙色の光が差し込んできて、もう夕方なのだと気づかされる。

次第に太鼓の音が響き始め、静かだった町が少しずつお祭りの熱気に包まれていく。

西日に照らされた路には楽しげな影がいくつも伸び、祭りの始まりを告げていた。